

神道文献

鎌田純一著

神 道 文 献

鎌 田 純 一 著

平成五年十二月十五日 第一刷

神道文獻

定価 二、五〇〇円
(本体二、四二七円)

著者

鎌田純一

発行者

神社新報社

印刷者

三報社印刷(株)

東京都渋谷区代々木一―一二

発行所 神社新報社

電話 (〇三)三三七九―八二一一

振替 東京六―一九六七八八番

はしがき

本書は、神社本庁「神職養成機関に関する規程」別表Ⅱに定める普通課程における学科目中の、「神道文献」の教科書として、その指導要領に準じ記したものである。その規程別表Ⅰに定める高等課程における学科目のなかに、これに相当する学科目は規定されてゐないが、その学科目中の「神道古典に関する講義又は演習」受講の基礎として、それにも資するやう考慮し記した。

神社本庁憲章第十一条第2項に、「神職は、古典を修め、礼式に習熟し、教養を深め、品性を陶冶して、社会の師表たるべきことを心掛けなければならない。」とある。即ち、神職たるもの、その修養のために古典を修めることを求められてゐるのであり、さらに同条第3項に、「神職は、使命遂行に当つて、神典及び伝統的な信仰に則り、いやくも恣意独断を以てしてはならない。」とある。即ち、神職はその使命遂行の準拠としても、神典に通じてゐなければならぬのである。現代の神職には、神職としての修養のため、またその使命遂行のため、古典・神典を修めることを要求されてゐるが、その修めるべき古典、さらに広く熟知して置くべき神道文献について概説する目的をも持つて記したのが本書である。

そこで、その修むべき神道古典として、古事記、日本書紀以下について、その概要を記し、その内

容の一部を引用提示することとしたが、さらに神職として心得て置くべき神道文献については、その最少限に止めざるを得なかった。ために、その撰択は必ずしも適切でないとの批判もあることは承知しながら、叢書類に所収、刊行され、比較的目にし易い書は出来るだけ掲げることとし、これも、その一部を引用提示することに心掛けた。その本文引用提示に当って、漢文体で記された書は、あるいは假名交り文に記し、提示した方が理解し易いかとも考へたが、本文は本文としてその儘に示すことが更に必要のことと考へ、そのやうにし、適宜訓注を加へ、理解に便にした。

神道、神道史、また神道神学等について、戦後多くの研究がなされて居り、それらについてもふれるべきかと考へたが、それは他の学科目「神道概論」、「神道史概説」、「祭祀概論」、「神道神学」等で当然ふれられる筈であり、重複をさける意味でも敢てふれぬこととした。

なほ、書名には便宜新かなづかひにより讀みを付し、巻末に書名索引を便宜のため付した。

目次

序 説

一 神道文献研究の目的	九
二 神道文献書目	一二
三 神道文献集成書	一六
付 神道百科解説書	二八

本 論

第一篇 神道古典篇

一 神道古典論	二三
二 神道古典	三七
(一) 古事記	三七
(二) 日本書紀	三九
○古事記、日本書紀論	四一
(三) 風土記	五三

○風土記撰上についての問題点……………五四

(四) 萬葉集……………六五

○萬葉集を通じてみた古代人の思惟……………六七

(五) 五国史……………七一

(六) 古語拾遺……………七九

(七) 新撰姓氏錄……………八二

(八) 先代旧事本紀……………八六

(九) 律令……………九三

(十) 延喜式……………一〇三

(十一) 中臣寿詞……………一〇八

(十二) 類聚三代格……………一二二

(十三) 類聚符宣抄……………一二六

(十四) 高橋氏文……………一二八

(十五) 新撰龜相記……………一二九

(十六) 天書……………一二〇

付

(一)	古代歌謡	一一
(1)	神樂歌	一一
(2)	催馬樂	二三
(3)	東遊歌	二四
(4)	風俗歌	二五
(5)	その他	二五
(二)	歷代天皇詔勅	三〇
(三)	御成敗式目	三二
三	皇室祭祀關係文獻篇	三四
四	神宮關係文獻篇	五〇
五	神社記・神社縁起關係文獻篇	六一
六	總括的神社關係文獻篇	七四
(一)	国内神名帳	七四
(二)	二十二社關係文獻	七七
(三)	一宮關係文獻	七八
(四)	總社關係文獻	八〇

(五) その他	一八一
---------	-----

第二篇 神道神学書篇

一 中世前期諸流神道書	一八九
(一) 神佛習合神道書	一八九
(二) 伊勢神道書	一九二
○ 諸書を通じてみた伊勢神道論	二二五
(三) 山王一実神道書	二二九
付 卜部家古典研究書	二三二
二 中世後期諸流神道書	二三五
(一) 伊勢神道書	二三五
(二) 神佛習合神道書	二三八
(1) 山王一実神道書	二三八
(2) 法華神道書	二四一
(三) 吉田神道書	二四二
(四) その他、神道関係書	二五三

三	近世諸流神道書	二五七
(一)	伊勢神道書	二五七
(二)	吉川神道書	二七二
(三)	吉田神道書	二七五
(四)	儒家神道書	二七七
(五)	垂加神道書	二八二
(六)	復古神道書	二九一
(七)	伯家神道書	三〇九
(八)	神仏習合神道書—雲仏神道を除く—	三一〇
(九)	雲伝神道書	三一二
(十)	通俗神道書	三一五
付	その他神道関係書	三二〇
四	明治大教宣布神道書	三二五
	書名索引	三三三

序 説

一 神道文献研究の目的

神道文献、神職たるものこれに何故觸れなければならぬのか。それについて考慮する前に、まづ神道とは何か。その定説的な概念規定は、まだないと云つてよい。しかし、その一つの試みとして、神道とは日本民族のあひだに発生し、その伝統に従つて祭祀をし、それを根底として生活する精神的ないとなみのこととも云はれる。また、別の視点より、神道とは日本民族のあひだに自づと発生し、道教、陰陽道、佛教、儒教、基督教等と対立し、しかもその影響をうけ、発達して来た固有の民族信仰をいふとも説明される。あるいは日本人の生活原理、あるいは日本文化の根底にあるものとのやうな説明も出来よう。

また、一方で神社神道と云ふ語も、既に定着してゐるが、その神社神道とは何か、これも定説はまだないが、日本民族のあひだに発生し、天照坐皇大御神を奉斎する伊勢の神宮を本宗とし、全国神社を崇敬し、その祭祀を根底として、その伝統と文化とを継承し発展させて行く民族のいとなみをいふとも云へよう。

そのやうな表現で十分でないにしても凡そ理解し得る神道は、日本人のあひだに、その祭祀を通じ

繼承發展させられて来たのであり、また、一般の風俗習慣のうちに、それは繼承され、發展させられて来たのであり、それは神道文献を通じて繼承されたものではないとも云へるかも知れない。佛教に於ける經典、キリスト教に於けるバイブル、回教に於けるコーランの如き聖典は神道には存せず、その点よりも特に神道文献を学ぶことをしなくとも、神道は十分に理解し得るとも云へよう。過去、大半の日本人はそれらに無縁であり、しかもそれらの人々の生活のなかに神道は存したのである。よつてさらに無縁のものともみる觀方もあるかとみられる。

奈良、平安時代に官吏その他には必ず修學すべき書が示され、また僧尼にも修得すべき多くの經典が示されてゐたが、神官神職たるものには、そのやうなものは一切示されてはゐなかつた。これらよりして、神道文献に觸れることはしなくともよいとみてよいのであらうか。

さうではないであらう。『日本書紀』撰上後、朝廷に於いて、御代替りごとに、文章博士により、この書を講じ奉ることがなされてゐたのであり、その参考として『古事記』、『先代旧事本紀』等が用ひられてゐたのである。このことは、よく心して拜すべきであらう。古典がわが国に於いて如何扱はれて来たか。それは道統の根本にあつたとも表現出来よう。

その『日本書紀』が、撰上後間もなく伊勢の神宮に存したことも知られてゐるところであり、延暦の『皇太神宮儀式帳』、『止由氣宮儀式帳』よりして、その撰修當時神宮には神宮古伝を記した書があり、禰宜以下それをよく辨へ、また続いて自ら重要事を記してゐたことも察せられるのである。

さらに、平安末期以降、これら古典についての研究は斯界に拡がり、鎌倉期以降、伊勢の神宮祠官、また京都の卜部家のほかにも盛んとなり、それにより神道神学が深められることとなったのであり、近世以降印刷術の発達とともに、神道書が広く一般にも普及したのである。これらをよく辨へ、神道を深く知り、体するためには神道文献に広く深く当るべきことを覚悟すべきであらう。

さて、神道文献とは何か。それは、広く神道を知るためのよりどころとなる記されたものことと云へようが、その範圍は広く、複雑である。一枚の古文書、また断簡のなかにもそれに該当するものがある。書物のなかにも、直接神道について論ずることを目的として記された書もあれば、直接それを目的としたものではなく、全く別の記録、歌集などのなかにもそれを深く讀みとれる場合があり、膨大な文書記録全体のなかに、それを通じて感じとれる場合もあり、また人によりそれを否定する場合もあらう。直接神道、神社、祭祀、神話等について記した書でなく、それ以外の書、記録、歌集、文書等のなかより、それをそれとするには、その個人の立場、見解でかなりの差も出ることであらう。よつて、その撰択にはかなりの問題もあらうが、それら複雑な論議を要するものを除き、客觀性を意識して觀て、神道を広く知覚するためのよりどころとなる記されたものを神道文献といふとしても、その範圍は膨大であり、とてもそのすべてにふれることの出来るものでなければ、その必要もない。書物としてまとまったなかの、神道書籍と呼称できる書だけでも、また莫大な数に上り、とてもそのすべてに当り得ないであらう。

そこで、それらのうち、神職としてその修養のため、またその使命遂行の準據とすべく当って置かなければならぬ書に限ってみて行くこととしたいが、それはどのやうな書か。

それには、神道の根源、本質を示す書とみられ、神道古典と呼ばれる書、その伝統を示す皇室、神宮また神社の祭祀、年中行事についての書、さらに中世以降発達した諸神道学説を記した所謂神道神学書等があるが、それらのなかのまた中心的な書、少なくともこれだけは書名を知るだけでなく、目を通す必要のある書について概説したい。

すなはち、「神道文献」なる学科目のなかで、神道文献のうちの文書、断簡等にもふれ、その取扱ひ法、解讀よりその紙背にひそむ先人の眞摯なる心を繼承することも重大と考へ乍らも、そのうちの神道書、神道書籍としてまとめられた書、さらになかで神道古典として尊重されて来た書、それに準ずる重要書をみた上、神道神学書を中心にみて、自らの信仰、学識の根底確立の基礎に資することを目的として行くこととしたい。

二 神道文献書目

神道・神社の祭祀に関する書籍は今日枚挙にいとまのない程存する。古代より現代に至るまで正に汗牛充棟、その数も知れない程あるが、その書名だけでも一覽出来ないか、それに答へるべくそれらの書籍目録が既に江戸時代より二、三試みられてゐるのである。大變な努力であるが、以下にそれを

紹介したい。

① 神道書目集覽

一卷

鈴木行義編

明和七年（一七七〇）撰

『日本書紀』以下江戸時代に成る『野中の清水』まで二百四十八部の神道書をあげ、その編著者名、卷数を記してゐる。これを通じて、江戸中期には、神道書としてどのような書が数へ上げられ、またそれらを基礎にどのやうに学ばれてゐたかも察せられよう。編者は国学者。（神道叢説所収）

② 神道分類総目録

一卷

佐伯有義編

昭和十二年（一九三七）刊

記紀以下、明治四十四年（一九一一）までの神道書目約一万部をあげる。総記、神典及古典、国体、神社、祭祀、神道、神祇制度、神祇職官、伝記、文学、武士道、心学及淘宮に分類し、あとに検索を付してゐる。書名、著者、編者、また校訂者名、つぎに著作、出版年代、写本、刊本の別、その年月日、卷数、所蔵者を記してゐるが、便利な書であり、座右に出来なくとも、一度は目を通して置く必

要があらう。編者は富山の人、慶應三年生れ、昭和二十年没、宮内省掌典、國學院大學教授等を歴任、文學博士。

③ 神道書籍目録

一卷

加藤玄智編

昭和十三年（一九三八）刊

明治聖徳記念學會の發行で、古代より慶応四年（一八六八）までに撰上された神道関係書目約一万五千部を掲げてゐる。上古、中古、近古、近世の四時代に分け、さらに近世では佛家神道、復古神道、伯家神道、伊勢神道、儒家神道、心學神道、宗派神道、垂加神道、土御門神道、吉田神道、雜家神道の十一部門にわけ、それぞれに属する神道書名、その編著者、成立年、刊本、寫本の別、所藏者、巻冊数を記してゐる。

なほ、これに続けて明治、大正、昭和年代（明治初年―昭和十五年）に刊行の神道書籍目録一卷を、さらに欧米諸國で昭和二十七年までに刊行された英、独、仏、露、伊語による神道書目録一卷を、昭和二十八年明治神宮社務所より公刊された。編纂に多くの人が當つたが、代表の加藤玄智は、東京出身、明治六年生れ、昭和四十年没。宗教學者であり、また神道を宗教學の立場より丹念に研究した學者。陸軍教授、東京大学、國學院大学、神宮皇學館、大正大学、駒沢大学などでも講じ、神社界に